

3. Immunoradiometric assayによる血清フェリチンの測定

高木八重子 久保 敦司
安藤 裕 近藤 誠
木下 文雄 橋本 省三
(慶大・放)

フェリチンは、人体組織における主な鉄貯蔵蛋白で、近年悪性腫瘍とくに悪性リンパ腫や白血病で血清フェリチン値が増加するとの報告がある。

今回われわれは血清フェリチン測定用キットであるヘキスト社製のリアグノストフェリチンを使用する機会を得たので、基礎的検討を行うとともに各種の悪性腫瘍患者における血清フェリチンを測定し、さらに同時に測定した血清 CEA 値との比較検討を行なった。

リアグノストフェリチンは競合結合によらぬイムノラジオメトリックアッセイの原理にもとづき、抗フェリチン抗体の付着したプラスチック球を固相とするサンドウィッチ型のアッセイ法による。

キットの基礎的検討として同一アッセイ内の再現性は3種の検体につき8回測定で平均 C.V.=6.5%，アッセイ間では4キット間で C.V.=8.2%，回収率は平均 100.8% であり、希釈試験では正常値の検体につき 3, 6, 12倍希釈で直線性が得られ、1,000ng/ml以上の高値検体でも7段階希釈で直線性が得られた。

正常人男女各40例の平均は男123.8±60.9 ng/ml, 女 29.3±26.4 ng/ml であった。悪性腫瘍患者について食道、胃、大腸癌でそれぞれ平均 379.8 ng/ml, 366.8 ng/ml, 211.7 ng/ml と高値を示した。CEA 値との比較では、CEA 低値の悪性腫瘍の中にもフェリチン値異常高値を示すものが多く認められ、両者間には明らかな相関はみられなかった。

4. 尿路腫瘍における尿中 CEA の再検討

木戸 晃 町田 豊平
三木 誠 大石 幸彦
上田 正山 柳沢 宗利
(慈大・泌)

尿路腫瘍33例および尿路感染症12例を含む泌尿器科疾患66例と、正常者18例に対し尿中 CEA を測定し、尿中 CEA の意義について検討するとともに、蛍光抗体を用い、膀胱腫瘍における CEA の局在性を検討し、尿中 CEA の由来につき若干の知見を得た。なお尿のCEA 測定は one step sandwich 法を用いて行ない、蛍光抗体法は sandwich 法を用いた。

結果：(1) 膀胱腫瘍、腎盂尿管腫瘍、尿路感染症における尿中 CEA 値と、正常者の尿中 CEA 値との間に推計学上有意の差が認められた。(2) 尿中 CEA と血清 CEA を同時に測定し、尿路腫瘍における腫瘍の進行例では、血清および尿中CEA がともに高値を示す傾向が認められた。(3) 膀胱腫瘍における CEA の局在部位の検討を行ない、移行上皮の細胞膜に蛍光が認められた。特に移行上皮最多層の剝脱した細胞に強い蛍光が認められた。

結語：(1) 尿と直接接する尿路腫瘍における尿中 CEA は、腫瘍の進行度の判定に役立つことが示唆された。(2) CEA の局在性を尿路腫瘍で検討し、上皮細胞の剝脱もしくは exudate が尿中 CEA 値上昇に関係していると思われる。

5. シンチパック 230 によるデータ検索およびレポートシステムについて

彌富 晃一
(都立駒込・放)
木下 文雄
(都立大久保・放)
久保 敦司 安藤 裕
(慶大・放)

本年2月にシンチパック 230 が当院に設置され、